見る

校　長　　武井　正明

球春到来、プロ野球のキャンプが始まった。まだまだ春が遠い新潟からすると、南国の太陽が羨ましい。吉中野球部諸君、あなたたちもあっというまに３月岡山の晴れ舞台がやってきますよ。準備は進んでいますか？

そのキャンプリポートでひと際興味を引いた選手がいた。ソフトバンクから巨人軍に移籍してきた甲斐拓也捕手である。
彼の選手生活は背番号 130 から始まった。ドラフト上位で入団する選手には、しっかりと「道」が用意されている。育成６位三桁の背番号の選手など、余程のことがなければ誰も注目してくれない。女手一つ、タクシー運転手をして育ててくれた母親に、楽をさせるために猛練習を積み重ね、４年目に見事レギュラーを勝ち取るのである。

彼の大きな魅力は「甲斐キャノン」と呼ばれる強肩である。実際に観たことがあるが地面すれすれに投げた球がそのまま糸を引いたように二塁ベースに届く感じだった。その球がまた滅法速い。これぞ超一流のプロ。溜息が出た。肩だけで客を呼べる選手である。

その甲斐選手が新天地、巨人軍の投手陣の球を受けている様子が出ていた。
彼はひとりひとりの投手の持ち味を確かめながら、積極的に話しかけ、投手との心の距離を縮めていく。
驚いたのはその次に出ていた映像である。
彼は受けている投手だけではなく、隣で投げている投手の様子も、つぶさに横目で追っていたのである。その眼差しは、投手個々の一挙手一投足を、片時たりとも見逃さないぞという鋭いそれであった。彼にとって投手の球を受けている時間は、総ての投手の情報を収集するための、全く無駄のない濃密な時間なのだ。隣で受けていた若手捕手たちは、それに気づいていただろうか。

本当の甲斐拓也のすごさとは、これなんだ。
彼が侍ジャパンの投手陣から全幅の信頼を得ていた理由を見た気がした。

子どもをよく見ている教師に、私は時に「よく見ているなあ」と感心する。
この生徒を伸ばしたいと思えば、どうすれば伸ばせるかと生徒に対して関心が湧く。そしてよく見るようになる。よく見るようになるから、生徒の些細な変化に気づく。変わろうとしている生徒が、気づいてもらって嬉しくないはずがない。そしてそれは「信頼」へと変わる。

教師の仕事も「見る」ことが、本当に大事な仕事である。